

「正義」と「真理」に抗して

—— トーマス・マンと政治 (1)

橘 好 一

「トーマス・マンと政治」という措定を行うとき、吾々は、この問題解明の座標を、先づ「非政治的人間の省察」の上に設定しなければならぬだろう。「省察」(以下「省察」と略称する)は、第一次世界大戦勃発の直後、一九一五年から、一九一七年の間に亘って続けられ一九一八年、ドイツがヴェルサイユ条約に調印することを余儀なくされた年に出版されたものである。「省察」に対する多くの文芸批評家の意見は、大体次の点で一致していると言つてよい。つまり、「省察」におけるマンは、まだプロシヤユンカー精神と「帝国」との信奉者であり、従つて国家主義的で、反動的であり、反デモクラシー的で反進歩主義的である、と言う点で意見を等しくしているようである。マルティン・フリンカーは、この間の消息を大体次のように報じている。先ずジェルジ・ルカーチュは、「省察」をマンにおける「政治的錯誤」と呼び、マンのデモクラシーへの回心は極端な性質を帯びた、イデオロギ

ー的政治的転換であり、マンは、一九一八年のドイツに取つての黙示録的な敗戦という経験の助けを借りて、ドイツ帝国主義を内面的に清算しデモクラシーの意義を理解したのだとする。つまりルカーチュは、「省察」を「戦争遂行中のドイツを擁護するとともに、デカデンツ、つまり病氣と腐敗、夜と死とへの共感を擁護する本……ドイツのデカダンスを正當化するためにめりこんで行つた癡癡的な試み」とみなし、マンの「決定的な世界観の転換」は戦後にあると見ているのである。アルフレート・カントローヴィツチュは、「省察」におけるマンの「喪われた部署」を言い、「絶望的に周囲に向つて八当りをした退却作戦」という風に「省察」を規定している。スイス人ローベルト・ファエジイは、「省察」からは、ナチスのイデオロギー上の先駆者の典型的な発言と見なされていゝような箇所を引き出すことが出来ると同時に、逆の後年の作品からは、兄ハインリヒ・マンが恥ぢ入る必要の

ないような詞華集を取り出すことも出来るのだ、と言っている。そして、マンは混乱の真只中にのめり込んで行くよりも、むしろ騒乱に超然としている。『au dessus de la mêlée』方がよかったのだとつけ加える。ヨナス・レッサーは、同じ基調でマンの「思想及道德的要求の自己訂正」について語り、この自己訂正を、マンの「死との共感」から「義務の思想と生の命令」『Pflichtgedanken und Lebensbefehl』への発展とみなす。エーワルト・ズスムートは、マンは「共和国への転進」を一九二〇年代になってはじめて準備しはじめたとする。マクス・リュヒナーにしても、マンの上に「態度変更」を見ていることは同じで、唯マンの態度変更は、マン独特の平衡尊重の感覚に発するものであり、一者が他者をしのいでい方に加担するのだという風に説明する。ハンス・ヴォルフは、最も好意ある態度で、この「多く批判された文書」を批判することを故意にさし控えた。カナダキングストン市のクイーンズ大学ドイツ文学教授ハンス・アイヒナーは、トーマス・マンの時局に対する政治的発言には余り価値を置かず、マンには時局に対する態度決定の能力が欠けてをり、従って「省察」を詳細に論ずるのは意味がない、マンは「省察」の中であげつらったテーゼのうち撤回しているものが多く、「省察」は唯歴史的興味を惹くにすぎない、としているのである。なお、アイヒナーは、一時は進歩の敵として現れ、従

って、ヒューマニズムの敵として現れたマンが、後に、「コムニズムの同調者」として再びヒューマニズムの敵となったという風にマンを見ようとしているのである。トーマス・マンの娘で、マンの遺稿の忠実な保管者であるエーリカ・マンは、「省察」はドイツの権力意志と反動的國家主義的硬直性から生れたものであるかのように論じられたが、この非難は謬りである、と言っている。この言葉は正しいが、そのエーリカにも、あの極度に成熟をとげた詩人が、どういう訳で「省察」にみられるような「頑迷さと絶望的な反抗」を示したのかについての真相がどうやら分らぬらしいのである。彼女もまた、マンが政治の現実のなかでは、「田舎じみたしろ」とであり、一人の「政治知らず」『sein in politischer Sphäre Unbehäuser』であるという結論に落ついている。

以上若干の例を見ただけでも、第一次大戦中の「省察」から戦後の活動にいたるマンの上に、明瞭な「転向」的前進を見る立場と、彼の「転向」そのものに、いさゝか当惑を感じている表情とが見られるのである。つまり「省察」は論じにくい本であるというのが伴りのない印象であろう。が、こゝにはもっと別の見方もあっていゝと思う。「この本は、出版されるや否や、多大の注目を浴び、そして総ゆる陣営から拒絶された。すなわちドイツの保守陣営からは、本書がドイツへの信仰告白的要素をもっていたにもかゝらず、余にもヨーロッパ的で、自由主義的であるとして反対され、西欧デ

モクラシーの内部、特にフランスにあっては、デモクラシーと進歩とに逆行する反動的論告として忿りをもってしりぞけられたのだ」とフリンカーは指摘するが、これはたゞちに「省察」の内面的構造の複雑性を語るものであらう。

ただ、マン自身は、この書の「序文」において、自らの立場を次のように明瞭に語っている。「文化が進んで行く方向を透視することは、さして困難ではない。そして大声叱咤しながら、その方向に歩調を合せる事は国内にざらに居る俗物どもの頭脳が想像するほどに立派なことじゃない。生の独自の行路を認証すること、生の反跳や矛盾や緊張を、生に必要な対抗重量を、生がその力の消耗によって衰弱する場合、その生に新しい緊張を附与するところの反対勢力、それなくしては生のドラマが進展しないところの敵役を——そのような一切のものを看ること、のみならず、自分自身の中で、それらが活潑に斗い合うのを感じること、これが人間を作るのだ。その時代において完全に人間である人間を……」。

問われているのは人独自の行路である。ただ、独自の行路などと言うものは、そう簡単に出て来るものではない。それは自我の発展のディアレクティクをまっとうな目で追ひ、自らの内部のドラマの苦渋に耐える者だけがよくするところだ。トーマス・マンの論理は、一時代のカタストローフを踏まえた騒音の中で獲得された極めて独自の論理だった、といえるだらう。既に見た通り誤解はたしかにあった。しかし、誤解とは常にあるものである。トーマス・マンにしたって、

時代の中に流布し激情化し切った合言葉と祖国の苦難とを前にして、自らの言説の公正さを維持する作業の苦渋さになだれようとしたことはあったに相違ない。だけど、こんな時、(すこし大げさな言い方をすれば)彼は自らの十字架の重さを知るのだ。十字架とは、こゝでは、究極の良心に担われた重き光榮のことである。そして、「良心性」は、「省察」を貫いている主要モティーフの一つである。マンは、「省察」のなかで「良心性」ということを強く述べている。たとえば、マンは、ニイチェにならって次のごとくに言う。十八世紀の啓蒙主義は、その観念的うわすべりと安易なオプティミズムの故に女性的でうそつきであり、その点十九世紀の現実密着的傾向は憂鬱でペシミスティックであるが、人より正直であり、マン自身は、精神的婚資としての決定的な部分を、この十九世紀に負っているのである、という趣旨のことだ。由来マンは、この良心性 *Gewissenhaftigkeit* の名において、自己の現実の問題性に密着しつつ造形して来た作家だった。「省察」に到るまでのマンは、個人心理主義的に自己の存在の問題性のみをあつかひ、自己の存在の異常性を自らの芸術の主題として、作品創造の苛烈な斗争を通じて健全な市民のモラルを自己の活動の上に奪取して来たのである。

彼の美学が「美」のための美学、つまりラアル・ブウル・ラアルの美学ではないのはこのためだ。それは、自己の存在に対する省察と批判とによる自己桎梏を通じての自己救済と

自己拡大の作業であった。「権力に擁護された」個人主義的
 審美主義の時代と呼ばれるのが「省察」に到るまでのマンの
 非政治的時期である。プロイセン帝国主義の危機の瞬間は、
 はじめて、対ヨーロッパという位相において新しい規模にお
 ける自己検討のモメントをマンに課することになる。こゝに
 問題は必然的に、ハヨーロッパにおけるドイツの伝統と現実
 Vという形でとらえられ、反面、あの時点におけるヨーロッ
 パデモクラシーに内在する諸矛盾とペテン性の告発が行なわ
 れることになり、マンはこゝではじめて正面きって「政治」
 と邂逅するのである。

客観的には、第一次世界大戦は、資本主義の進展と共に発
 展した列国の国家主義が、各々存在を賭けて争った帝国主義
 戦争である。それは、いってみれば、資本主義社会のアナ
 キーな内部態勢を語る *bellum omnium contra omnes* の原
 理に基いた国家的規模の争いであった。しかし、戦う者には、
 また、戦う者のレトリックがある。この戦争の主役ドイツに
 対して、列強の協商は、「文明」の名を前面に押し出したの
 である。それは、「野蛮」に対する「文明」の集中的な懲罰
 行為であるかに装われたのだ。ドイツは、この時、防衛戦を
 言うことも出来たであろう。しかし、そうなれば、これは悪
 循環である。トーマス・マンの思索は、勿論、そういう単純
 な意味でのドイツ擁護にあったのではない。結論を先に言っ
 てしまえば、マンは二十世紀初頭のヨーロッパの知性その
 のが、帝国主義的競争の渦中で喪失しようとしていたもの、

ある正しいもの、正義と真理を口にするヨーロッパの指導階
 級一般の言葉の下から洩れ喪われようとしていたもの、ある
 未来を孕むもの、それを究明し擁護するという作業を、彼の
 祖国が巻き込まれている戦争の現実のなかで敢行したので
 ある。この現実のなかで、自らの良心の安定につながる精神
 的位相を発見するという彼の作業は、必然的に「両面作戦」
 になる外はなかった。彼は如何なる味方もなく孤独な戦を戦
 った。それがいわば彼の十字架だったのである。

吾々は、「省察」において、マンの “Über-Deutschum” と
 “Anti-Demokratie” という二つの特色を見る。「省察」の核
 心にあるイデーを、一掬のもとに汲みとる事は及び難いこと
 ではあるけれど、こゝにあげた二つの特色を吹きあげる源泉
 は、どうやら、マンのコスモポリタリズムと平和主義の精神
 にあるように思われる。以下この二つの基底に立って、マン
 の「超」ドイツ性と反「デモクラシー」を究明してみたい。

第一次大戦にいたるヨーロッパの政治的現実のなかで、ビ
 スマルクの現実主義によって進められたプロイセン体制のイ
 デオロギーは恐らく単純なものだった。それは、ホーエンツ
 オルレンの権威とそれをめぐるドイツ民族の神話的英雄主
 義に彩色された富国強兵の原理に立つ「世界に冠たるドイ
 ツ」のイデオロギーである。「鉄血」の名を冠せられた宰相
 ビスマルクの権威主義とマキャベリズムは、立憲君主体制下

の諸政党を右にあげたイデオロギー又は国是の枠の中で操り、「無敵のドイツ帝国造成」という力の現実主義の周辺に「サントータン」化したドイツの大衆を結集することに成功した。ビスマルクは、大ブルジョワジーの利益を代表して多数派を構成する国民自由党を彼の足場としていた。彼はドイツにおける高度資本主義を完成するためこの自由党のエネルギーを伸長する方針を取った。自由党は自由貿易主義者であり、経済的自由と議会議の外観を氣にする西欧化したところがあった。彼等の中心には既に西欧化した大工業家大商人そして多くの大学教授がいた。ビスマルクはしかし、政党分立というデモクラシー方式の中に、たゞ「統治」の手段を見ると言うだけの現実主義者だった。彼は、この第一党としての自由党と、他に保守党——つまり、王の大権と軍隊及ルター教会の周辺に結集している生粋のドイツ人気質の政党とにたのみつゝ、彼一流のマキャベリズムを駆使し、その時々局面において、宗教問題についてはカトリック中央党と斗い、社会問題については社会民主党を抑えつゝ、プロイセンの君主政治と西欧の政治的経済的自由主義との妥協の上に対内政策を樹立し、ユンカーとブルジョワジーの利益を守り、強大な資本主義的帝国を完成したのである。彼はドイツ国民の幸福と繁栄を「上から」与えることに一応成功したかに見えたが、これは権威と服従との原理によって真のデモクラシー意識の欠如、つまり政治に関する国民の関心の貧困を利用し益

々これを麻痺させるという彼の心理的政策の成功を語るものである。一八九〇年、ビスマルクは失脚し、ヴィルヘルム二世の治世ははじまった。ビスマルクは自らの手でしか動かせなかった巨大な機械「ライヒ」を危機の皇帝の手に委ねる。

ヴィルヘルム治世下のドイツは、貧しさの中から余りにも急速に成上つて来た「新興国」の様相を鮮かに露呈した。そこには成金的支配者共の旺盛な産業熱だけが見られ、経済的に高度の成長を遂げたブルジョワジー（リユーベックやフランクフルトの門閥的ビュルガーとちがった）の狂暴な金権政治への熱中だけが目立った。彼らは人間的内面性の充実を伴った完成された生活様式の質的な高さを知らず、一定の思想の枠は殆んど皆無であり、哲学的教養の伝統もなく、政治上の識見や定見に到ってはまことにおそまつな徒輩だった。彼らは、マンの「ブデンブロークス」におけるハーゲンシュトレームや、ゲオルゲ・グロッスのカリカチュアの生みの親である。一方、労働者プロレタリアは、ひとたび与えられた、それもさうやかな相対的幸福のために革命的精神を喪失し、自働的に進行する貧富の差を黙認し、たゞ「ライヒ」の膨張のみによって自己の階級の繁栄もまたから獲られるという依存的な国家中心主義の情緒によってライヒの機構にエネルギーを吸引される。このような一般的な風潮のなかで、ヴィルヘルムはドイツの世界政策と植民の必然を強調し、全近東をドイツの完全な保護国に化せんとする意図と汎

ゲルマニズムを打出しヨーロッパ全体に生々しい恐怖と反感とを喚起する。そして、ドイツでは、一九一四年直前、世界のトップを負誇る高度の工業生産のための市場獲得と物質的繁栄を保証する為の手段として軍備の無制限な拡張が自明の理の如く国民によって承認されるのである。かくてドイツは、西欧資本主義諸国による集中的憎惡の標的となった。ドイツが西欧特にフランスに与えた印象は「頭を下げて突進する怒れる牡牛」のそれであり、「野蠻」のそれである。アンタート、つまり「文明」の側はドイツを帝國主義の元兇に擬し葬り去るべきバジリスク(怪物)としたのであった。これが近代ドイツの辿った悲劇にいたる客観的歴史のいきさつであるけれども、トーマス・マンは、この戦争を内面の問題として受取った。つまりモラルの問題として受取ったのである。そして戦争当事者のいずれの側にも、モラルの衰弱が認められた時、戦争そのものは、彼にとつては、まことにドミナントなモラル壊廢の表現だった訳である。トーマス・マンはこの戦争を「文化」対「文明」の形に置き直してみる訳だが、ではこの両者の現実的限界、ひいてはモラルの壊廢はいかなる形で見られただろうか。

僕は、さきにプロイセンの「力の現実主義」を指摘して置いたが、その背景には、情念的に俗惡化したドイツの文化主義が伏在していることに気づく。とすれば、この閉鎖的に「お国自慢」化した「文化」の概念を、それが落ち込んでいた俗惡性から救出し、文化の精神を正当の位置にかえすこと

が、あらためてマンの課題とならざるを得ないのである。そして、この点にマンの内面的發展のスカラが、彼が多年のあいだ落こんでいたプロビンシャルズムから抜け出してヨーロッパの規模のものに高められるモメントがあるのである。

ところで、ドイツ人の文化主義の核心にあるものは、「内面性」であろう。「内面性」とは何か。この抽象概念を一掬のもとに正確に捕捉することは困難だが、その大まかなインタプリタツイオンは次のようになるだろう。つまり、それは一切の繊細さに対する傾倒であり、心の深部の感覚を大切にすることであり、超俗的な内面集中であり、自然帰依心であり、清純無雜さ嚴肅さと正確さとに支えられた思索と良心とへの傾倒である。要するに、それは、高い抒情詩の本質的特徴と深く結びついたものである。ドイツの形而上学、ドイツの音楽、ドイツのリートの深さ、そして比類なき一回性をもった文化的所産一般はこゝから出て来るのだ。ルターのレフォルマツイオンにおける妥協のなさも、ゲーテの一般化されたものに対する反抗と巨人的な無限追及も、ショーペンハウアーの人性透視も、ニイチェの誠実なモラリズムとしての形而上学も、ワグナーの頌歌的音楽も、そしてドイツのロマン派も、一切はこゝに発しているのである。憧憬しつつ夢みる心、深い沈潜、幻想的「精神的なるものへの志向、深みのある諧謔性、高度の芸術的洗鍊、一切の上にたゆとうイロニーが、内面性及自由の概念と結びついているのである。

こゝで、見のがしてはならぬことは、こゝには、先ず、「個人」というものがかけがえなく在るということである。個人の内的、自由の深さと広さと大いさの問題があり、そして、其処で問題が終っている、ということである。これが、非政治的な伝統的ドイツの文化観念であった。

トーマス・マンはこのような「文化」の概念をどのようにに解明し推進するだろうか。

マンによれば、クルトゥーアという語は、最初の綴字だけが異なるところの *rites* という語と語源を等しくして居り、クルトウスは宗教的聖物を崇拜しこれを保全するという意味を持つ。「文化」は、純粹人間的な、そして美的・道德的な内的個性の洗煉、醇化、高揚を意味する。「文化」の本領は、間接に世界を促進する効果を目指す点にあるのであって、原理的には、自己浄化という個人の作業が、何かしら神秘的な仕方で「全体」のために役立つことを確信しているのは宗教の場合と変りがない。この点は、「文明」がコントラ・ソシアルの原理に立って直接に人間社会全体のために役立つことを目指すのとは異なるのである。ドイツの人間の形成者であり教育者であったルターも、シラーもゲーテも、シューペンハウアーも、ゲオルゲも——これらドイツの教養の偉人たちは、みなドイツの文化概念の頂点に立つ人たちであった。彼らは、「文明的」人間つまり「デモクラット」ではなかった。なるほど、彼らは市民的自由と巨大な教養を呼吸して来た結果、

ドイツ文化の高度性と高貴性を代表するが、（そして、マンもまたかゝるドイツ文化の代表者の系列に立とうとする）彼らにあって見落してならない肝腎の点は、土と血の制約がない点である。つまり、彼らはコスモポリタンである、と言うのがマンの特徴的な規定である。そして、この点に、マンの世界市民的教養主義とドイツ人一般の文化主義的シュービニズムとの間の著しい相違点が指摘されなければならないのだ。

ピスマルク・ヴィルヘルムのライヒにおけるドイツ人一般の文化主義的シュービニズムの問題性は、内面主義的「文化」の概念が「クルトウス」の概念と不可分に結合した点にあるだろう。マンは、「ローマン主義」は一面においては、ドイツ民族にとっての一つの深淵であり、正直さの『厭世主義』であって、西欧の進歩信仰に対しては、彼らの現実的伝統によって反抗し、一切の口頭禪的道德主義や理想主義的世界美化に対して反対する」と言っている。こゝに言われている口頭禪的道德主義や世界美化と言う言葉は、後にあの時点における西欧デモクラシーの実態を検討する時に明かにされる筈であるが、ローマン主義がドイツ民族に取っての運命的深淵である点の一つは、ローマン主義そのものが、一つの現実主義に結びつく可能性に求められねばならない。マンも指摘し、僕らも容易に分る通り、「文化」をドイツ精神の高さとして誇示する心性、つまり「文化」崇拜の精神の裏は、西欧的「文明」をツイピリザチオンと言う語で軽視するという心性を語る。

そして、こゝでは、ドイツ文化の卓越性と永遠性に関する信仰そのものが、力の觀念と結びつくのだ。彼らにとって守られねばならぬのは、「文化」そのものではなくて、その担い手であるドイツ民族の「独善的選民意識」である、ということになるのである、これが彼らの組織体擁護の手段としての「国家至上主義」へと移推するのである。ビスマルク・ヴィルヘルムのライヒがこれであり、ヒトラーの第三帝国のなかにもこの心熱は作用していたであらう。ドイツのローマン主義が一つの現実主義として登場し、「文化」概念の低下と狭隘化独善化そのものを告げていたのだ。

マンの世界市民的教養主義は、こういうドイツ人一般の文化ショービニズムを完全に超えていた。彼にとつては、ドイツの国家を、いや十九世紀ドイツの精神生活の特徴づける「プロイセンの哲学」(ヴインデルバント)つまりヘーゲル哲学に支えられる「国家」の理念を絶対化し、生活目標にすることはナシセンスに近かった。ヘーゲルの最も鋭敏な対立者であったショーペンハウアーを援用しながら、彼は次のように言っている。「私はヘーゲルの意見などは露さら持たず『国家』は『現世の神』の如く尊敬せられるべきものとは思わないし『国家』に『自己目的』なぞ見ないのである。国家とは精神的なものであるよりも、むしろ技術的なものであり、一個の機械である……私は人間の職分が国家に社会的なものの中へ解消するとは思わないし、そのみかこういう意見は非人間的だと思う。」このように、あの帝国主義時代における国家至上主義「国家」

のアポテオーズによる権力国家の觀念をはるかに彼の意識は超えていた。従つて軍國的プロイセンが、ドイツ主義の理念としてかゝげていたところの、かの神聖ローマ帝国に肖つて粗描された汎ゲルマニズム、汎ドイツの騒音などは唯の不作法であり笑い草として一笑に附していた。彼はつゞけて言っている。「私は単独である。私は傍観しているのである。私はナツイオーンのなかに解消することによつて、ナツイオーンの榮光などを借りるよりも、むしろ自力で下等人間に止つていた方がよい」と。「下等人間」とは、常識の意味における愛国者に対置された人非愛国者Vぐらいの意味であらうが、勿論、マンはあの時点におけるコスモポリタンの苦難と榮光の名において、非理性的に情念主義的な人万才愛国者Vたちの戦列を離脱していたのであつて、彼の忠誠心は、いわば人ドイツ人であると同時にヨーロッパ人Vであるような存在を生み出すときドイツ人の文化エートスの価値そのものに向けられていたのである。こゝで明瞭になったことは、マンにとつては既に『国家』が絶対のものでないということだ。ただ、マンの、俗物的愛国主義、修身教化書祖國愛からの離脱は、何も『省察』をまつて出て来たものではない。彼は、大戦に先立って既に、ドイツ一般の英雄主義が内包していた内面的デカダンスを、彼自身の問題性として引うけつゝ分析する作品を計画していたのであつた。それが、戦争勃発の年、一九一五年に「フリードリヒと大同盟」と言うエッセーの形で世に問われたのである。フリードリヒとは——例

のフリードリヒ大王、つまりドイツ随一の啓蒙的専制君主であり、軍隊と官僚とのすぐれた養成者であり、ホーヘンツォルレルンの権威の完成者であり、歴代プロイセン王統並にドイツ民族統合の神話的偶像である。彼はヴォルテールの友であり、サンクスシー宮の建設者であり、当時の一般ヨーロッパ人の驚異のもとであり、天才的巨人と目され、ドイツ人によって、唯一無二の異名を奉られた人物である。エセーと散文叙事詩 *Prosepoppe* の中間を行く『フリードリヒと大同盟』が、ヨーロッパの孤児ドイツをめぐる全ヨーロッパの戦の渦中において世に問われたことは、ドイツのヨーロッパの戦の渦中としては、まことにタイムリーだった、とも見えかねない。ただし、この作品のドミナントな特色は、実は、エーリヒ・ヘラーの言をかりて言えば、まさしく「イロニー」であり、この作品の本質と効果とは、ドラスティックな偶像破壊にあったのである。マンは、いわば、八神話なき天才のイロニーニッシュな悲劇を描きドイツ帝国主義の方向のむなしさ、その倫理的虚無を描いたのである。そして発表の時期が、ドイツ帝国の危機の最中に当たっていたがゆえにこゝにも誤解があった。進歩陣営から汚辱は集中的に投げつけられた。曰く「野心、虚栄心、無責任な便乗主義、国民詩人の役割を演じ、声高に愛国心を誓言することによって、人を忘却に陥れようとする野望、精神に対する裏切り、募りつゝあるカタストローフの意味と範囲とを知らぬ愚昧さ、これによって個人的利益を引き出

さんとする下心、寄生虫根性……」、とさんさんである。しかも、これが進歩的文明文士である兄ハインリヒから発せられているのである。だが、この作品のドミナントな特色は、先にも言った通り「イロニー」なのである。直線的非イロニー的進歩主義者ハインリヒにはマンの精神的身幅が、常識的神話「フリードリヒ」の影像を超えているのが見えなかったのだ。先にものべたように、この作品の直接のモチーフは、第一次大戦の現実の中にあるのではない。つまり、このエセーは、専制君主フリードリヒの八青銅の巖の如き主権の確立とプロイセンの民衆統一の事業を讃美することによって、大戦を敢行しつゝあるライヒの現実との間に背後でひそかに精神的戦斗力のパイプを通じあっている、という観点から見られるべきではないのである。この作品の動機は古い。それは既に、「ヴェニスの死」のなかで、業績倫理と威儀のモラルの個人的完成という役割を了つて滅びて行く一人の国民詩人グスターフ・アシェンバハの肖像によって先取されているのだ。つまり、この作品のモチーフは、マンの内面的問題性そのものゝなかにあったのであって、マンの文学的実践と精神的成長との正統性を正確に踏まえているのである。デカダンスから出発し、デカダンスの仮借なき分析者となり、デカダンスを拒絶し、デカダンスとニヒリズムの克服を目指して努力して来た、そしてドイツを超えようとするマンの、モラーリッユな視野に泛んだところの、歴史的人物の影像がフリー

ドリヒだった。こゝには、グスタフ・アシェンバハが芸術(精神)の業績倫理家であつたのに対して、いわば政治の業績狂信者、いやアナキーな業績の幽鬼Vとでも言うべき一形姿が描かれるのである。「ヴェニスの死」は、ドイツ的に完成した一人の芸術家における問題性の追及であつたが、「フリードリヒ」は、ドイツにおける政治の代表者における問題性の追及であるとすることも出来るのである。

秀拔なる業績をねらう Leistungsschik そのもの、つまり業績倫理一般は、それ自体としては美しい徳目であらう。

しかし、業績の人間的高さそのものは、その普遍的価値によって計られねばならないのである。業績倫理が国家的利己主義の狭き枠を脱することが出来ないとき、それはヒューマニズムにとって甚だしいマイナスとして作用する。マンは第一次大戦へと傾斜しつゝあつた現実一般に向つて、かゝる無価値と化し去つた業績倫理の虚しさを暴露したのだ、ということも出来るのである。これは一指導者の戯画であり、ドイツの独善的英雄主義の悲劇のパロディーであり、更に言えばドイツの保守的インテリゲンチヤの無意識な、内面的危機のパロディーたるの位置を持つてであらう。ではフリードリヒは、どのように語られたか。以下ヘラーによって、これを一瞥しよう。

父フリードリヒ一世によつて、一人のタウガニヒツ——ダンディであり、ボヘミヤンであり、懦弱なるハイブロウとして蔑まれ疎外されて来た王子は、王位に即ちや手のひらをかえすごとく、武断政治の苦業者となり、彼の兵士と官僚の偶

像となると同時にヨーロッパの恐怖となる。彼は絶望的に戦争を遂行するが、それは戦に何等かの高度の人間の意義があるからではなく、たゞ戦には負けぬ、という事実によつて、戦争一般における自己の天才性を自証するために過ぎない。

つまり、彼はあらゆる戦に勝つが、戦勝は自らが不敗だということへの狂的確信以外の何物をも齎さないのだ。彼の領土が荒廢するというのなら、彼はそれを、再建のための莫大なエネルギー伸長のまたとないきっかけとして歓迎するだろう。人民への衝動的愛を感じれば、自らが「賤民」とさげすんでいる者たちに田畑を返してやる為に身を粉にしてみせもする。彼はヴォルテールに帰依し「余はなべて英雄なるものを憎む」と書く手に接吻はするが、自らは英雄的存在の究極を求めて、ドンキホーテの身振よろしく狂奔する。そして自らを不死身であると信じているのである。彼の勝利は意志の勝利には相違ないが、彼自らは自身を運命の単なる道具としてしか受取っていない。彼は言う「牡牛は犂を惹かねばならぬ、海豚は泳がねばならぬ、そして余は——戦争を行わねばならぬ」と。こういう矛盾に充ちた形姿が、トーマス・マンの見たドイツ民族の神話的英雄フリードリヒ二世だったのである。

フリードリヒの「意志」は人理性とモラルとの壊滅Vの中に空転し、彼自身は無内容な武断的「權威」の犠牲者と化した。「この天才の邪悪さ奸策、異常性は仮借なく描出されて居り、しかも、敵手マリヤ・テレージャのまぎれもなき愛情にみちた描出に比べれば一層これがはっきりと目に見えて来るようだ」

とヴィクトル・マンは述べている。世界は、フリードリヒにとっては、彼の狂想の道具であり、さまざまな理念は彼の玩具にすぎぬ。自らは啓蒙主義者を誇稱しつつ、彼は自らの政治を神秘なる本能の手に委ねてしまう。これこそ絶望せる精神の英雄的反抗の姿であり、一種巨大な政治力のニヒリズムであり、業績エートスの狂的空転以外の何ものでもない。たしかに、ヘラーも言うとおり、「愛国的ドイツ人のもとで、フリードリヒ大王がこれほどベシミスティックに語られた事は曾てなかった」のである。たしかにこれは一つの痛烈にしてドラマスティッシュな人偶像破壊であった。それは一面からみれば、トーマス・マンによる、「ドイツの神話的偶像」の主知主義的分析だった。それは、ひいてはドイツ民族一般に内在する神話主義的侵略的愛国心の打破を目差すものであった、と言ってもいいであろう。これが、第一次大戦を戦いつつあったドイツ民族の上にまともにたゞきつけられたのである。「この粗描は実にみじんの香煙も隷従的敬意をも交えずに王の姿を描いており、それ故に、一九一四年にこれの出版が許されたことは、一年後のハインリヒのゾラ・エセーの出版許可と同様驚くべきことだった」と再びヴィクトル・マンは報じている。

ところが、このフリードリヒ・エセーにはまた、「文明文士」の忿恚を買うような側面のあることも否めないものである。つまり、大戦勃発後のアクチュアルな事態に照応させてみるとき、アンターントの側の「正義」感情を揶揄しているとし

か思われないような部分があるのである。よく引用されているのは、たとえば、次のようなくだりである。「そこでフリードリヒはザクセン突破の命令を下した。ザクセン国境を？だがザクセンは中立だったのだ！そんな事はどうでもよかった。フリードリヒは八月二十九日、七千の髭武者をひきいてザクセンに侵入した。この前代未聞の平和侵犯、国際正義侵犯に対して盛り上って来た騒擾は想像もつかぬ。だが、吾々はヨーロッパに聴く前に、フリードリヒの言うところに聴こう……」。こういう言葉の照明を受けて泛び上って来るところの第一次大戦におけるアクチュアルな事態は、ドイツ軍によるベルギーの中立侵犯である。マンは、右にあげた「フリードリヒ・エセー」中の言葉に呼応するように「私はドイツのベルギー侵犯を美しいとさえ思う」と『省察』のなかで書いた。それは、あたかもマンがアンターントの側のドイツ圧迫に対して発した八目には目を、歯には歯をの論理のように聞えないこともない。しかし、恐らくこれは、マンのイロニーニッシュな逆説である。それは、帝国主義時代のヨーロッパの殆ど宿命的な政治的現実を背景にし、「文明文士」、「ゾラ・エセー」によるハインリヒ・マンの挑戦を前にして出てきた逆説だったのである。もう一步を進めて言えば、あの時点におけるヨーロッパの政治の現実と、マンが抱懷していた真のデモクラシーの観念との間の甚だしいずれ、つまり、マンが屢々括弧に入れて用いているヨーロッパ「デモクラ

「シー」の甚だしい倫理的歪みに對して投げつけられたところの悲痛なイロニーだったのである。では、当時の「デモクラシー」はいついかに如何なるものとしてマンの目に映じていたのか。僕は、こゝらあたりで、論点をマンの反「デモクラシー」の上に移さねばならない。

トーマス・マンは、『省察』の中で次のように書いている。

「時代の國際的傾向は國民的傾向にすっかり平衡を保たせるように私には思われた。資本と社會主義の國際性、ヨーロッパの通商錯綜、入交通と入保障とに時代のイニシアティブを見ている市民的理想は、現在の世界状況に見られるほど長期の戦争などついに起り得ないと思われた。」

こういう見透しは甘かったとしても、この言葉は、マンのモラリテイを語る点で、マンにとっては本質的なものだったと言ふ点は見のがしてはならぬものだろう。マンによれば、古くからのデモクラシーの代表者はイギリスとフランス、つまり國民經濟の古典的國家と革命の古典的國家である。ところで、『國民經濟』と『革命』の本質は、入利用厚生と人間の美徳である。それはまた、『政治』と称せられ『文明』とも称せられるのである。そして、フランス革命の精神と國民經濟の理念とが、正しいヨーロッパ主義というものを帰結しなければならぬのである。彼らは平和裡に自由な生産と取引をすることによって、次の段階では、常に進歩の人道主義的な剩

余価値を作り出して行くのであり、あるいは、行くべきものであつてかゝる方向こそがヨーロッパ主義のヨーロッパ的定義というものである。当時の支配者的ブルジョワジーがモラルの面で頹廢し切つていたとしても、マンが『社會主義の國際性』という言葉で表しているとおりの、ブルジョワジーのアンチテーゼとしての社會主義運動はまた國際化していた。これを先ずドイツの事情から簡單に見て行こう。カルル・マルクスは一八八三年に、エンゲルスは一八九五年に死んだが、これよりさき一八四三年マルクスの『共產黨宣言』と時期を接して、ドイツの未完の革命である三月革命が起る。この革命は、組織の背景を持たない革命勢力と、知識人進歩分子や學生の無經驗のために唯の暴発に終る。この一八四八年のドイツの革命につゞく三十年は、『王政への逆行と反動の時代』と呼ばれる歴史的時代である。一八五〇年以降ドイツにおける革命の振子は全く止まつてしまつたかに見え、この間にビスマルクのプロイセンの支配体制が確立されるのである。しかし、ビスマルク体制の地下には、革新主義の激流が流れていた。一八七五年にはフェルディナント・ラッサールのひきいる「全ドイツ労働者同盟」は、ベルンシュタインの「アイゼナハ派」とゴータにおいて合同會議を開き、いわゆる「ゴータ綱領」を宣言している。一八七八年五月、ペルリンのウンター・デン・リンデンで、鍼力職人ヘーデルは皇帝ウィルヘルム一世の馬車を狙撃し、つづいて六月には、国

有地小作人の息子ノービリン博士は、同じ場所で皇帝を獵銃で負傷させた。これらの暴漢たちは社会民主党とは直接の關係を持たなかったが、ビスマルクの反動体制はこの事件を利用して、「公安を害する社会民主主義に対処する」弾圧的法案を成立させた。この法案は、一八九〇年ビスマルクの失脚と共に廃案となるが、同年「ドイツ労働組合総連合」が組織され一八九一年エールフルト大会の基本綱領決定と共に、ドイツ社会民主党大会は、ドイツ国内各都市で頻繁に開かれるようになる。第一次世界大戦に至るまでの間に、社会主義の陣営で活躍した知名の士をあげれば、一八四八年の革命に参加したヴィルヘルム・リープクネヒトがあり、彼は革命失敗後ジュネーブにのがれ、後一時ロンドンにあったが再びドイツに帰来、ベーベルと共に社会民主党強化の為に協力している。ヴィルヘルムの息子カルル・リープクネヒトも、ローザ・ルクセンブルクと共に社会党左派に属し、共に後年一九一九年に反政府的暴動を組織したかどで惨殺される。又ベルンシュタインは、社会主義者鎮圧法に追われチューリヒに移住し、そこで発行された「ゾチアル・デモクラット」紙を編集し一八九九年修正主義理論をかゝげ、またカウツキーの「ノイエ・ツァイト」紙をも編集した。ドイツの国内文学の面から見ても、社会民主的思想は、遠くハイネやゲオルク・ビュヒナーの革命思想の流を引き、ゲルハルト・ハウプトマン、アルノ・ホルツ、リヒャルト・デーメル、ハインリヒ・レルシュその

他の作家たちは、社会民主主義の文化運動に強烈なエネルギーを与えていたのである。以上がドイツにおける潮流の粗描であるが、マンが「社会主義の国際性」を言う以上、次にイギリス及びフランス及ロシアのそれに触れなければならない。社会主義の発祥地はイギリスである。紡績工場の共同所有者で、実践的社会主義思想家としてのロバート・オーエンを持つイギリスは十九世紀既にフエビアン社会主義の思想圏を国内に持っていた。この「フエビアン協会」に属していた文学者思想家には、バーナード・ショウ、H・G・ウェルズ等が居り労働党政治家ラムゼイ・マクドナルドがある。一方フランスでは、既に十八世紀末、フランソワ・ノエル・バブーフが「平等者」を組織し大暴動を計画して刑死したのを手はじめに、空想社会主義のシャルル・フーリエ、「私有財産は盗みである」と喝破し、十九世紀のロシア人道主義の偶像となつたピエール・ジョゼフ・プルドン、そして「サンシモニズム」のクロード・アンリ・サン・シモン、私的企業と経済的自由競争の克服を目指したジャン・ジョゼフ・ルイ・ブラッシー、一八七一年のパリコミューンに参加した極左的革命主義者ルイ・オーギュスト・ブランキ、更にツールーズ大学の教授で、一九〇二年「ユマニテ」紙を創刊し、その反戦論の故に大戦を前にしてナシヨナリストの手で暗殺された徹底的平和主義者ジャン・ジョーレスがある。一方、ロシアでは一九〇三年にロシア社会民主労働党は、メンシェビキとボルシ

エビキに分裂し、ツアー体制の内部を一層騒然たらしめていた。普通第一インターと呼ばれる「国際労働者協会」のロンドンにおける創立は一八六四年のことであり、以来社会主義運動はブルジョワジーのアンチテーゼとして公然たる社会勢力であった。こういう勢力が、帝国主義的ブルジョワジーの暴走を抑止し、それぞれの民族の内部に平和的均衡を保持しつつヨーロッパの内部にデアレクティックな「進歩」が招来されるという予想をマンが抱いたとしても、それは如何にも平和主義的マンには相応しい見透しだったのだ。

しかし、この予想は裏切られた。「権力と商売をめぐる戦争」であると同時に「イデー間の戦争」はマンの意に反して起ってしまったのだ。つまり、「クルトア」と「ツイビリザツイオーン」の戦争が起ったのである。このときトーマス・マンは、彼のペシミスティックな人間観の観点から、ロマン・ロランに向けて次のように言っている。「人類が白い衣裳を纏い棕櫚の枝を手にし文学的な額の接吻を交しながらさまよい歩くようにでもない限り、地上には時々戦争があるだろうと私は考えた。人類が血管の中に静かな油をでなく血液を有するかぎり、時々これを流したくなるだろうと考えた。それゆえ私は平和主義者となる訳には行かなかった。しかし、私は平和的ではあったのだ。」平和的——たしかにマンは平和的だったのだ。彼は、「世界を軍事的平和の観点から治療しようと思うのは皮相であり、狂気であり、幼稚であ

る」と考えていた。いかなるばあいにも軍事的手段による平和の工作はナンセンスであると考えていたのである。問題は内面の問題であり、モラルの問題であった。しかし、現実はいく、マンのあのペシミスティックな人間観に確証をでも提供するかのうちに彼に戦争という事実をつきつけたのである。かくて「文明」はマンの前にそのラディカルな姿を露呈した。マンは、こゝで、ドイツ精神批判から一転して、モラリストの立場から、「文明」つまり、あの時点における「デモクラシー」の内部を検討するという役廻りを引き受けざるを得ない。

こゝで余談になるが、ポール・ヴァレリの、世紀末から二十世紀初頭にかけての人間の混乱をえがいた「精神の政治学」の言葉をひいておくのも徒事ではない。ヴァレリは言う。「現代人は、そしてそこにこそ彼が現代的である所以が存するのであるが、彼の思想の奥にかくれている数多の相互に相反する命題と共に生活する事に慣れていて、それらの命題が代るがわる意識の明るみに出されるのである。……私はそこにまた、現代の世界を一つの面において、又単一の縮尺に従って表現することの困難さ、というよりも、その全く不可能である原因を見るのである。現代の世界を論じて混乱に陥らないということはあり得ない。しかも歴史について知られている事を根拠として、この全般的な困乱の次に何が来るかを推測しようとすることは無意味である」(吉田健一氏訳)と。当代のフランスのインテリゲンチヤ大衆の内面的現実が如何なる微妙な

混乱の様相を呈していたとしても、ヨーロッパ国民の大部分は、あの危機に際して、最も単純な人間的感情乃至は本能に賭けてしまったのである。本能的感情、つまりい、わゆる愛国心である。そしてマンによれば、彼らをこゝまで駆り立てたのは、あの「レトール・ブルジョワ」Rheor-Bourgeoisだったのである。ヴァレリは戦争にのぞんで沈黙した。「フランスの精神的代表者として、世界大戦というテーマに対してたった一言でも発言するという役廻りを不承無承ながらも引き受けるような真似をしなかった人の例としては、ポール・ヴァレリやアンドレ・ジッドやマルセル・ブルーストのような人たちがいる。専ら自らの撰択による問題提起にのみ従事し、外部から押つけられた設問には絶対に受答えをしないところのこうした精神の高さにトーマス・マンは及ぶべくもない」とマクス・リュヒナー Max Rychner が手ぎびしい批判を加えている由をフリンカーは報じているが、トーマス・マンが、プロイセン的ドイツのためのハペンの従軍Vという姿勢でこの「省察」を書いたのではないことは「序文」の次のような言葉をまつまでもなく「省察」全体を読めば分ることだ。「序文」にあるのは次のような言葉である。「私は権力主義のユンカーでもなければ、重工業資本家でもない。又資本家と結託した社会的帝国主義者 Sozialimperialist でもない。私はドイツの貿易制覇に死活の関心を抱いてもいないし、ドイツが大いなる政治と帝国主義の大国となるべき天授的使命をもっているのだという点については、その反対者とし

て、疑惑をもつものである。」

ところで、当時のドイツに対してこのように批判的だったマンが、一方西欧側にみた当時の「デモクラシー」の本質と実態はいかなるものだったか。

トーマス・マンによれば、「文明」の政治形態はデモクラシーである。しかし、あの時点におけるデモクラシーは括弧つきのそれ、つまり「デモクラシー」であった。

「フランス革命から『哲学』を引き去れば、飢餓の叛乱が残る所有関係の変革が残る。しかし、それではフランス革命が甚だ不当に扱われたことになるだろう」とは、「省察」に見られるマンの警句だが、一七八九年、フランスの革命的市民階級の中であって、liberté, égalité, fraternité (自由・平等友愛)の語に結集されて生動していた倫理的エネルギーは、もはや資本主義化したブルジョワジー内部には保持されてはなかった。支配的ブルジョワジーの合言葉と化したこの言葉の内容は、いやその実態は liberté, sûreté, propriété (自由・安全・所有)にすりかえられていたのである。そしてフランス人一般は、この実質をすりかえられた合言葉に同調させられたのである。つまり、あの時点におけるフランスのブルジョワジーの「自由」とは、ドイツのライヒに対する恐怖からの自由であり、かたがた植民地及び市場の無制限な拡大と所有とへの自由であり、安全とは宿敵ドイツからの安全であり、所有とは無制限な、財産と資源の所有を意味したのである。西欧諸国にあって、「デモクラシー」を代表している

のは、資本主義的ブルジョワジーであつた。国家における権力及び国家の経営はブルジョワジーの手中にあり、西欧のデモクラシーは、ブルジョワ・デモクラシーであつた。

かつてフランス革命は、古きレジームに対するブルジョワの勝利であつた。以来政治的優位はブルジョワの上にあつたが、ブルジョワジーはその優位と権力を保持する過程において、リベルテ・エガリテ・フラテルニテの内実をリベルテ・シュールテ・プロプリエテにすりかえ、正義の原理は毀われ、彼らの生の目的は、金銭の力による自由と安全と所有との拡大という俗物的生活意識に変貌したのである。かくて資本主義的ブルジョワジーによって代表されるデモクラシーは民族主義的となつた。そして、民族主義化した彼らの「デモクラシー」は攻撃的、侵略的となる。フランス革命の光榮を担う市民階級の末裔は民族主義的デモクラシーという鬼子と化したのである。彼らのナシヨナリズムは、真のデモクラシーのナシヨナリズムとは結びつき得ない。つまり、ブルジョワジーのナシヨナリズムは、力のナシヨナリズムであり、政治主義的であり、侵略的である点において、正しくこの一点において、平和主義的な純正のデモクラティックなナシヨナリズムとは異なつていたのである。彼らのデモクラシーは、単なる「見せかけ」に過ぎず、「文明」や「デモクラシー」のレトリックの背後には、他民族を重んじ信頼するどころか、反つて他民族の弱点につけ入り、自らの為にせんとする野望

がかくされていたのである。彼らがどれほど「デモクラシー」の装いを凝らそうと、彼らのア・モラーリッシュな実践の面で彼らはインターナツィオナルであり、反体制派に対する不断の威圧の面でもインターナツィオナルである。マンは、苛立ちと侮蔑と怒りと深い洞察とをこめて、國際的「民主主義的」デモクラシーについて語っている。「彼らのナツィオナリスムスの原理は原子的で、アナーキーで、反ヨーロッパ的である。」「本当の文化は斯る輩には無縁である。彼らは唯金儲けと政治しかわきまえず、何度言つてみたつて政治しか知らないのであつて、政治を金もうけの手段と考えているのである。彼らはドイツの（この「ドイツ」は「私の」（つまり「マッ」の）とよむべきところだ）敵であり、最も本能に密着した、最も毒々しい、最も致命的な意味において人類の敵である。この『平和主義者づらをした』『道徳家ぶつた』そして『革命の子』としての修辭的ブルジョワつて奴は。」「デモクラシー」は反動的である。何故なら、それはナツィオナルであり、全然ヨーロッパの良心を有しないからだ。ドイツの敵のうち何処の国にヨーロッパの良心があるか。たとえば、それはイギリスにあるか。群小国家のエゴイズムの恥知らずの振舞は別として、そして彼は次のように極言する。「ヨーロッパの良心、超國民的な責任感、たゞ非政治的な反デモクラティックな民族にのみ、ドイツにのみ旺盛なのだ」と。この「ドイツ」という言葉もまたコスモポリタンなヒューマニズムのモラル

を踏まえた「マン」ということばに読みかえなければ、マンの主張のコンテキストをよみ繚ることになるだろう。

それにしても、マンは、たゞめくらめつぽうに、「デモクラシー」の、つまり「文明」の侵略性をなじっているのであらうか。そうではない。マンは殆ど地震計 Seismometer の感さで、「文明」の側の犯した政治的悪徳をよみとっていたのである。マンは、彼の立言の根拠となるデータを「省察」のなかで列挙している。すなわち、彼は、オーストリア分割を企てたアンターン側側の計画や、英国外務省の陰險なモロッコ政策や、パリの対露貿易の戦略的意図や本質、そして「*Le Journal*」紙や「*Le Journal*」紙やノースクリップ系新聞の特質などを嗅ぎ分けていた。彼はまた当時の英国におけるデモクラティズムと帝国主義との併存を懸念し、イギリスが如何に自由主義的政府のもとに置かれていようと、貿易及び植民の点では常に敵手を威圧するという政策を遂行するのを知っていた。その他、彼はブル戦争、つまり南阿戦争についても関心を持っていたし、アビシニア遠征やリビア戦争や米西戦争や日清日露戦争、そしてバルカン戦争の本質的意義を知っていた。いずれも帝国主義戦争であったものを彼は無関心で見過してはいなかったのである。特にフランスについては、その長い独仏関係を通して、彼らの侵略意志をあげている。マンはモルトケの言葉を引用して次のように言っているのである。「全然反対の主義のために、フランス人が我々の

ところに何度やって来たか知れやしない。教皇の名において、彼らはブルグント（ブルゴーニュ）を奪い取った。絶対君主制の名においてシュトラースブルク（ストラスブール）とオランダを侵犯した。正統王朝^{レジティム}の名において、イスパニヤとナポリとロートリンゲンを得た。そして最後に、自由と共和主義の名において、オランダ州とニーデルランデとライン左岸の全部を併合するか少くともこれを密接にフランスに結びつけた。」そして、マンは一九一二年モロッコに対する平和的侵入を念頭におき、ロマン・ロランが、ドイツのベルギー通過を非難する癖に、自国のモロッコ侵入については頗かぶりをすると言うロランの政治性いや、その発言の政略的片手落を非難するのである。そしてマンは、第一次世界大戦におけるインテリゲンチヤ文学者即ち「文明文士」に対して次の言葉を投げかけている。「イタリアがリビア征服をいたづら小僧めいた輕卒さをもっておぼじめた時文学聖者たちの抗議は、何処にかくれてしまったのか？ フランスが厚顔にも協約を破って、イギリスの蔭にかくれて、モロッコを『席捲した』とき、彼の反帝国主義の道徳感は何処に行ってしまったのか？ 問題は『デモクラシー』の側の意志に関係していたが故に、文明文士は一切を是認したばかりでなく、全国民がこれを是認するようにするために努力したのだ！」たしかにマンが指摘する通り、戦争は修辭的にかき立てられ激情化した「愛国心」の支えなしには尠くともそれへの使喚なしには遂行出来ないであろう。吾々は帝国主義戦争時代の根底に、

「愛国心」という心理的事実が蟠居しているのに気づかない訳には行かない。

ところで、愛国心とは、そのプリミティブな次元において、民族の自己保全という本能的感情と結合しているものであろう。そして「国家」が民族の自己保全の為の一手段であるかぎり、愛国心は、容易に国家的利己主義と結びつくのである。つまりこういう愛国心は、普通民族の内部で漠然たる「感情」として受け取られている。そして、それは、普通、「国家」の線で停止するのである。それはまた偏狭なショービニズムとも結びつく。美辞的な修辭法^{レトリック}で飾られた理念めいたものによって国民の使命感がゆすぶられ、民族の卓越性と自尊心とが独善的修辭学によって媚びられるところに、この田舎々々したショービニズムが生れる。かくて民族国家の感情的愛国心は、閉鎖的で独善的で排他的で侵略的戦斗的となる。

この点は、第一次世界大戦のあの時点においては、ドイツも西欧側も同じだった。マンは、ヨーロッパ民族国家のこの未開化的な愛国心をみた。マンは、超ナツィオナール^{ユーパー}なドイツの精神界の偉人たちの諸性格を明かにすることによって、硬化したドイツのショービニズムに警告すると同時に、「文明」のチャムピオン意識、つまりフランスの心性をもあばいている。

マンによれば、ドイツ人はフランス人にとっては「悪臭を放つ」人間だった。これについて、マンはモリエールの「フィガロ」の中の一挿話をあげている由をプリンカーは指摘し

ている。それによると、野良で労役に従事しているところのドイツ人の捕虜の一人に目を止めたフランス人が「毒虫」という言葉を浴せかける。そして、出来れば、そいつをなぐり殺してやりたいところだが、そいつも結局は人間なのだからそういうわけにもいかないのだ、と言うのだ。フィガロの相棒はこの男にすっかり感心してしまい、彼の言葉につけ加えて次のように言う。「この言葉にあ、百四十年にわたるラテン文化って奴がにじみ出てるわい」と。更にまたマンはフランスのある精神病学教授の言葉を引用している。それは「一体ドイツ人は人間じゃない。むしろ何か下等な種族に属するものだ。このことは、彼らの感覚器官、下腹部、臭気、そしてまた彼らの動物的孤絶を愛する性質によってみれば手に取るように明かだ。」というのである。マンはこれらを恐怖すべき「憎悪の莫迦騒ぎ」*Narrenrei des Hasses*と呼び、それは屢々西欧「デモクラシー」の人間性観念の中に含まれているものだ、と言っているのである。その他、フランス人の侮蔑の対象となるドイツ人気質というものは、探せばいくらかもあるのである。たとえば、フランス人の制服嫌いは有名で、彼らは一般に「おし着せ」なるものを服務時間に限って仕ようことなしに一着に及ぶが、プライベートな生活に帰れば直にそれを脱ぎ捨てる。が、ドイツ人は、ベッドに上る時にさえもそれを脱ごうとはしない、と言ったたぐいのことである。ドイツでは、セダンの戦勝記念日「セダン・ターク」が祝われ、

フランスでは七月十四日に、ストラスブールにあるヴェイルヘルムの影像にヴェールを被せ、軍隊や愛国主義的群衆が敬意を表すのである。これらはすべて二十世紀初頭における未開化的ナショナリズムの「莫迦騒ぎ」であろう。しかし、何と云っても重大なのは、フランス人における「革命の子」としての自負心と使命感にひそむところの、それこそドイツ人のそれに劣らぬ独善性である。あの時点においてフランス人が持っていた使命観 *Missionsidee* は、その担い手たちを極度に侵略的・戦闘的にした。彼らは、彼らによって蔑まれていたような使命意識を持つ国家に対し、つまりフランスの指導的立場に服しようとしぬ民族に対して侵略的になり不寛容になるのである。トーマス・マンによれば、フランス人はこういう使命観に立っての連帯意識によって、ドイツ人よりも容易に国民的結束を行おう、と言う。非政治的なドイツ民族は、内部的には分断的で、結束するとすれば、神話主義的・礼拝的な集団として防衛的に結束するだけで、フランス人が、「ナシオン」の意識のもとに共通の連帯感をもって政治的・攻勢的に結束するとは異なる、という意味のことを言っている。ともあれ、これら一切の未開化的情熱が、西欧のレトール・ブルジョワたちに依って、ドイツの「文明化」つまり「デモクラシー」化の美名のもとに動員されたのだ。彼らのスローガンは、相もかわらず「リベルテ・エガリティ・フラテルニテ」だった。ドイツは根こそぎにされるか

に見えた。

W・マトウルは、一九一二年バーゼルで開催された社会主義インターで採択された宣言をつぎのように述べている。「戦争勃発の危険が生じた場合、労働者階級および当該諸国におけるその議会代表は、インターナショナル執行部の総合的活動にもとづいて、彼らに最も効果的と考えられる手段をもって戦争の勃発を防止するために全力をつくすことを義務づけられている」と。しかし戦争が近づいても何処の国にも革命的な戦争反対の行動は見られなかったのである。ドイツ国内にあっては、ベルンシュタインの「修正主義」は、労働階級の資本主義との連帯性を宣言し、国家への協力に偏向していた。（たゞハ独立社会党のみが社会党の分派の勢力として、カール・リープクネヒトのスパルタクス団と共に、征服戦争の原理に反対したのみであったが、彼らはドイツ国民により誤った裁きを受けた）。フランスでは、既述のごとく社会運動指導者ジャン・ジョーレスを斃した銃撃は、同時に同国の社会主義にも命中していた。個々の国における社会民主主義者たちは、彼らの運命を彼らの「国家」に縛りつけてしまっていたのである。帝国主義化したブルジョワジーの体制の内部における有力なアンチテーゼをもって任じていた社会民主主義者たちのモラルの弱さはこのような形で暴露された。ところで既に見たごとく「私は資本主義と結託した社会的帝国主義者でもない」とマンは言う。正に然りである。あの時点

においてマンはドイツ国内における如何なるドイツ人のタイプにも属さなかったのである。しかし、あのドイツの危機の最中において、「如何なるドイツ人のタイプにも属さないドイツ人」とはいったいどんなものだったのか。国家と国家が暴力をもってぶつかり合っているとき、も早「祖国」の現状を断念し、「墮落せる祖国」への忠誠心を喪った人間はどうすればよいのか。良心をギセイにして国家の行動に殉じよと言うのか。人は知性や理性や良心を殺して行動出来るのか。知性人にとって理性と良識とへの忠誠心を喪うことは自殺にも等しい事ではないのか。しかも、「国家」は巨大な権力を持ち、その威圧のもとに、個人の沈黙を、そして知性の自殺を迫るであろう。断判停止を迫るであろう。祖国のあやまりを指摘する者には、叛逆の刻印を押し、投獄や刑死をもって酬いることも出来るのである。第一「祖国」への情念的忠誠心のみに生きる同胞は、このときなべて「国家」の「目」と化し、彼を監視し、何時如何なる時に彼を告発するかも知れないのである。こういう事情のもとにトーマス・マンは置かれていたのではなかったのか。しかも、なお、マンは守るべきものを持っていたのだ。愛しそして、いとおしむべきものを持っていたのである。かくて彼は孤独なる道によって「時局に対する」彼の負ひ目を果すのである。彼の「ペンの従軍」は一つの偽装であった。いまや「偽装」以外にはこのカタストローフからの脱出の道はなかったのである。彼は、彼に独自の方

法であるイロニーを武器として選んだ。そして、彼は「愛国」のそぶりによって、どれほど深く、俗物化したドイツ精神を斬り、一方ドイツ擁護の姿勢のもとにどれほど熱意をこめて、アンターントの側の知性と良心に訴える試みをしていることか。彼はドイツのベルギー侵犯を弁護するが如き口吻のもとに、ロマン・ロランに訴えた。ヨーロッパ文明がカタストローフを迎えつゝある現在、ロランのように、「どちらがより侵略的であるか？」（傍点筆者）という次元で問題を論ずることの愚劣さをマンは指摘したかったのである。「フランスの大砲は尊敬すべきものに見え、ドイツの大砲は罪深くていやらしく愚劣である」という論理ほど愚劣なものはないからである。Audessus de la mêléeを標榜するあの高貴なロランにさえこの誤謬があったのだ。マンの指摘したかったのは、ロマン・ロランのそうした政治性、否こういう表現のもつ政略性、そのナンセンスぶりだった。あの戦争は、いや戦争一般は右にのべたような次元で論じられるべきではなかった。このカタストローフに陥入したヨーロッパ諸国、そしてそれを黙認した知識人の理性の提携の力弱さを如何にして救い出すか、そして理性の強靱さをいかにして恢復するかが問題だったのである。つまり、戦争そのものの根源を衝き、それを摘抉することが重要だったのである。その表現が晦渋で誤解を招きかねないものであったとしても、マンの発言そのものは、沈黙のヴァレリヤジッドやブルーストよりも、

正当ではなかったか。

ところで、吾われはこゝで『「ゾラ論」——「省察」アンチテーゼ』として知られている兄ハインリヒとマンとの間の Bruderzwist に簡単に触れて置かねばならない。ハインリヒ・マンの Zola-Essay は、マンの Friedrich-Essay に呼応した形で一九一五年に書かれたものだが、その本質はドイツの帝国主義を正面切って攻撃するためのものだった。これを「ゾラ論」としたのは、やはりドイツ帝国検閲当局の目を眩ませるための人偽装であるいは踏晦だったのである。彼は、第二帝政体制下におけるドレーフス事件を中心とするエミール・ゾラの活動をあつかい、スゴン・アムピールの特色をドイツ帝国の現実に擬したのである。その中でハインリヒは言う。

「人は根底においては帝国を信じないのだ。さしあたりのところ人は、まだ帝国の力に信頼を置いている。それは殆ど打克ちがたいものと思われている。しかし力が正義と等しいものでなかったら、力とはいったい何であるか。義務充足の意識、斗い取った理想、高められた人間性に根を下した最も深い正義でそれがなかったならば。専ら暴力の上に立ち、自由と公正と真理の上に立っているのではない帝国、命令と服従のみがあり、奉仕と搾取とのみがある帝国——それは勝つ訳には行かない。どのような超人的な力をもって戦の場にのぞもうとも」。マンにとっては、恐らくこの正当な理論に異論のあろう訳はない。既にみたごとく帝国主義的ドイツの悪徳

の数々を承知し、そういうドイツから鋭く自らの立場を区画して来たマンである。マンの怒りは恐らくハインリヒの中に、イデオロギー的に「フランス化したドイツ人」を見た瞬間に発しているのである。つまり、ドイツ文化の正当な伝統を念頭から滅却している一人のフランス人をハインリヒのなかに見たことに発しているのである。またしても、こゝには「文化」はなく、「政治」だけがあつたのだ。それは、政治的にドイツが「文明化」されることだけを希う異邦人だった。マンは、その男ハインリヒを「文明文士」のなかにかぞえ入れた。あの時点における文明文士の言説は、マンにとっては「頭脳の陶醉」にすぎなかった。彼らに取っては、フランスの大砲は高貴に見え、「ドイツの大砲は罪深くいやらしく愚劣だった」のである。彼らは帝国主義化した西欧ブルジョワジの本质に目をつむり、成上りのドイツの悪徳のみをドイツの「全体」と誤認してドイツをたゞき、果ては、ドイツ文化の根源と中核をなす正しい伝統をさへ完膚なきまでに葬り去ろうとするのである。こゝにも、マンが、政治化した文明文士の誤謬と非をあげ、ドイツ文化の正しい伝統とヨーロッパ的意義を解明し説得すべき動機が存在した。そのために、マンは、兄ハインリヒの、恐らくは誤解に基く反感を利用さえしなければならぬという暗鬱な状況のもとに置かれるのである。彼は、兄ハインリヒを含めて「文明文士」を酷烈な言葉で非難はしているが、ハインリヒの帝国主義的ドイツへの憎

悪の背後にあるいわばモラーリッシな精神を見落すようなことはしなかった。彼は「省察」のなかではっきりと述べている。「彼（文明文士そしてハインリヒ）の動機は、精神的、すなわち高貴なものであることは明白である」。「この隔絶は、我々が根本的には、全く同じ意見であるだけに、一層遺憾に思う」と。マンは、結局はヨーロッパの帝国主義的アナルヒーに反対する点で、二人は共通しているのだと言いたげである。

「ヨーロッパの今日の状態に、そのアナルヒーに、万人に対する万人の戦に、この戦争に、罪過があるのは、実に国民主義的デモクラシーである。国民的原理はアトミスティックな原理であり、アナキスティックな原理であり、反ヨーロッパの原理であり、反動的原理である」と、マンは「省察」で述べた。そして、彼はあの時点におけるブルジョワ・デモクラシーを口を極めて非難するが、では、マン自身は人類文化をどのように考えているのであろうか。僕らは、次に、マンにおいて、「文化」と「文明」のアンチテーゼが、どのように統一されて行くかを見なければならぬ。

マンの「文化」観については、さきにドイツの「文化」シンポジウム乃至文化主義的オブスクランティズムを考えたところで一部分触れておいた。しかし、マンはつゞけて次のように述べているのである。「『文明』は、理性、教化、疑惑、

啓蒙、そして最後に解消の意味における精神なのである。一方『文化』は、芸術的に組織し、建設し、生を維持し輝かせる原理である」と。「文化」の原理は、あくまでも、個人主義的に追及せられるべき芸術や哲学の無限の深さや精緻さへと向う原理であり、「文明」のそれは、人間の個性的発展よりも先ず、社会的国家的に馴致された人間の状態を作り出す原理である。「文化」は人間一般の蒙昧や野蛮を全体として気にかけない。それに対してはむしろ静観的である。つまり「文化」の社会に対する関係はむしろ間接的である。「文明」はしかし、「文化」が直接に関心しないものを、直接の目標とする。つまり「文明」は、平均的に社会一般を問題にし、人間の外部的条件一般に関わるのである。「文化」は、より個人集中的であり芸術的哲学的である。ドイツの「デヒター」の概念に纏綿しているのは、孤独にして代表的な個人造成、つまり文化の原理と雰囲気とであり、より社会的啓蒙主義的な概念「文明文士」又は「シュリフトシュテラー」に対立する。「文明」はより政治的であり、「文化」は非政治的である。「政治」は平均化と妥協と便宜主義と方策であり、一方思想や行動のエキストリミテートは、むしろ芸術や哲学の中に存在するのであり、またすべきである。「文化」は人間精神の深みと高みにと徹するのであり、「文明」はむしろコントラ・ソシアルの整序を目ざす。しかし、このような説明は単なる図式にすぎない。問題は、ドイツ文化の正統性のなかに成育して

来たマンのコスモポリタニズムが「文明」の發展する方向と如何なる点で折合うか、ということではなければならない。マンは次のように言っている。

「人は文明を国家的に秩序づけられ馴化された人間的状態としてあつさり定義づけようと試みたが、これも私には満足出来ないのだ。何故ならば、文明は国家の線で止り得るに止まり余りにも精神的な原理であり、又国家の解消に向つて進まないにしては、余りにも甚だしく解消への意志だからである。文明は国家を解消するだけでは満足しないだろう。それは国民的激情を睡りこませ再び起きないように葬り去るだろう。それは、そこではもう戦争が不可能であるような平和のエスペラントの世界を創造するだろう。見らるゝごとく、私は文明を信ずる。それは未来であり、進歩そのものであるからだ。いうまでもなく文明は平和主義の一項目であり、究極においては、文明の本来の項目は進歩そのものである。文明は純粹と平和とを愛する。けれど文明は文学であり、精神であるからである。」(傍点筆者)

右の言葉を正しくインタプリットするには多くの頁を要するが、さしあたり要点だけを取りあげよう。

先ず、こゝには、偏狭な国家中心主義、激情化したプリミティブなそして次第に非合理的なものを含むことが明かとなつたいわゆる低次元の「愛国心」というもののへの否定があるということである。謂わば、自明のものとして合言葉的に受取ら

れ手垢に汚れしければ政治によって使喚されてきているところの独善的利己主義的「愛国心」への痛烈な批判があるということである。フリンカーによれば、後の「ドイッチェ・ヘーラー」『Deutsche Hefen』の中で語られているマンの愛国心のまっとうな在り方は次のように定義される。それは「民族の伝統、文化、言語、つまりそこから人間が出て来るものに対する愛情なのである。そして、この愛情は人間のもっとも高貴な發展形態、国籍を異にする諸民族の精神的魅力と文化的功徳とに対する共感と称讃とに大変深く結びついているものである。」マンにあつては、ヨーロッパの平和は(そして世界の平和は、と言つてもいいだろう)インターナツィオナルなものであつてはいけなものであつて、ユーバーナツィオナルなものでなければならなかつた。インターナツィオナルの平和は、ただかパワーポリティックスを背景とする武装平和であり、いわば「不安の平和」である。こゝでは、まだ国家相互間、民族相互間に眞のデモクラシーが行なわれていない。そしてこのとき、愛国心は国民主義的感情、その偏見や憎悪を超えることは出来ないのである。「平和」は、眞のデモクラシーに取つては絶対的の要請であり、国際間の政治的便宜主義の中で使用さるべき相対的「手段」ではない。「ライヒ」の体制と「レピュブリク」のデモクラシー体制が、政治の次元で、つまり「力」の次元で対決するという情景は、マンに取つては、それ自身がイローニッシュな効果をもつところの、避けられるべき愚劣事だつた。「途方もないことになつたものだ、いったい君らは何をやっているんだい」という

ようならう、た、え、た、眩きが、「省察」の背後から洩れて来るのである。

次に、トーマス・マンは「文明」の概念の内に「文化」の概念を包摂せしめている、という点が重要となる。ただし、「文化」の精神が真にその機能を發揮する為には、「文明」の精神の社会的・教育的表現であるデモクラシーの体制が必然的に必要となるからである。そして、こゝで注意しなければならないのは、デモクラシーは政治的デモクラシーという単純な外的仕掛けのみをもって終るのではないという点である。政治的デモクラシーは一般に投票権デモクラシーとして受取られがちである。投票権デモクラシー、つまり普通選挙制度への趣向ならばドイツも既に受け入れていたし、尠くとも受入れる体勢にあった。個人的創造力を自由に伸ばせしめるための経済的平均、政治的素質を自由に伸ばせしめるための国家技術的・教育的手段としてのデモクラシーの制度は、ドイツ人のエートスの中にも侵入しつゝあった。それは、おそらく自明の趣向であった。しかし、デモクラシーが、政治のデモクラシーとして投票権デモクラシー、つまり選挙権改正の線で終ることについては、トーマス・マンの意識の「抵抗」は当然に起る。現に政治的形態としてのデモクラシーそのものの中から、西欧の帝国主義的ブルジョワジーの支配体制が生誕し、マンの眼前でその悪虐を恣にしているのである。ところでデモクラシーの政治は政党政治である。政党には党利党略

というものがある。政党はまた社会諸階級の個別的利益というものと結びつく一面を持つ。階級や特定政治人の独裁や野心を避ける為には、民主主義政治は必然的に複数の政党による政党政治でなければならないにしても、形式的多数決原理がギリギリの線で物を言うところでは、マジョリティを保持する政党の独裁的傾向への傾斜は避けがたく存在する。政党はその組織と総ゆるコネクションとをあげて、そしてその旺盛なる日常活動を通じて人々の投票規制の方策を磨き、一方主権者「人民」の自由なる選択と判断とは常に正確であるとは限らないであろう。マンの指摘するところによると、シェーペンハウアーの仮借のないリアリズムは、彼に、「人民は永久に未丁年の主権者であり、腹黒い詐欺師らのおもちゃになり易い」と言わしめているそうである。そしてマンには、この苛辣なシニズムを前にして、これに反論する根拠は、あの時点においてのヨーロッパの如何なる国家体制の現実のなかにも見当らなかつたのだ。それだからこそ、マンは「省察」序文で次のような危険な言葉を書きつけるのである。

「私は次のことを深く確信していることを告白するものである。ドイツは単純な理由からデモクラシーを愛し得ないのだ。理由は、ドイツ民族は政治そのものを愛し得ないからであり、そして悪名高い官憲国家 *vielverschriener Obrigkeitsstaat* こそドイツ民族にふさわしい、民族によって希求された国家形態であり、この点を変えることはないだろうからである」と。

右のマンの云葉を額面通りに受取り「官憲国家」を現実の「ライヒ」の体制そのものに等置するならば、これほど反動的な言葉はないだろう。しかし腐敗した「デモクラシー」の政治主義へのマンの嫌厭と彼の表現の内面的屈折性とを背景にしてみると、むしろそれは、マンの理想主義を語るものであり、この言葉は「序文」のコンテキストのなかでは、もっとちがった意味になる筈だ。何故ならば、この言葉は、「フランスがその政治家たちによって何処へ持って行かれたかを見るならば、『政治』では全然うまくゆかぬこともあるからだ」という言葉を踏まえるからである。『政治』では全然うまくゆかぬ」という言い方で示される事態は、言うまでもなく帝國主義化したブルジョワジーのブルジョワ・デモクラシーの悪徳、なかんづくハ戦争Vという「死」の状況に向う方向である。そして、彼らの「真理」や「理性」や「正義」がどれほど美辞的な口頭禪的修辭学であり、その実践がどれほどひどいモラルの壊敗を露呈していたかは、既に見た通りである。投票権デモクラシーの基礎の上に立って出て来る政府乃至国家権力は、一般に人民の承認と委託の上に立つものとして認められているにしても、この国家権力によって政治的に導入され規制されようとする統一体には、真の人間的自由としての精神の自由の場が喪なわれるという可能性も存在するのである。「一つの哲学を社会と国家の考え方にし土台にすることは、精神と政治の両方にとって危険である」とマンは

言っている。又彼は言う、「人間精神の最も重要な部分、すなわち宗教、哲学、芸術、詩、科学は、国家と並んで、国家を超えて、国家の外に、そして可なり屢々国家に抗して、存在するものだ、と私は思う」と。そして、この言葉は、「人間の職分が国家的・社会的なものの中に消え去る、という意見は、不愉快で非人間的である」とする思想につながっている。こういう思想的背景の前面で、マンの Obrichtestat という概念はどのような意味を帯びるのか。既にみた通り、マンは V Obrichtestat A によって、帝國主義的国家形態だの、大資本家の支配体制だの、あるいは資本主義的エリート市民の支配だのを意味しているのではなく、いわんやプロイセン軍部官僚の独裁、その他いかなる形での独裁的政權の支配する国家をも考えているのでもないことは明瞭である。ところで「腹黒い詐欺師たちのおもちゃになり易い、永久に未丁年の主権者人民」というショーペンハウアーの人民ペシミズム、ひいてはデモクラシー・ペシミズムはどのような展望をふまえるだろうか。ともかくショーペンハウアーはまた次のようにも言っているのである。「正義それ自体は無力である。A正義VはA不正Vに対する単なるA否定の精神Vにすぎない。本当は正義が支配するのではない。現実的にはA威力Vが支配するのである。政治の要諦は、A威力Vを正義の側に引きずり込み、A威力Vにより正義が支配するように仕向けることである。共同体のなかにA不正Vの残存する程度

が尠いほど政治の業績は上ることになる。それが余すところなく行なわるときは理想的目標ではあるが、この目標はどうせ近似的にしか達成せられない。けだし \wedge 不正 \vee は一方の側において仕末されると、反対の側からそれは再びこっそりと忍び込んでゐる。なぜならば、 \wedge 不正 \vee は深く人間性に根ざしたものだからだ。」これは、秀拔なる、真実の指摘であり、そして警告である。マンが、政党のみによって担われる国家経営に反対する理由もおそらくは此処にある。特定政党が手中に持っている国家権力の手で指導される文化の統一体内在する欠陥は、その体制の中に究極の人間的自由がない、ということである。逆に政治一般はむしろ、体制を超越した自由なる「精神」によって監視されなければならないのである。つまりあらゆる党派というものを超越し、党派の利益、金銭的利益、権力への関心、それら一切を離脱し、何者にも拘束されないところの、然も人民によって決定され、人民の深部に根を降して居り、その無条件な信頼と支持の上に立ち、どのような弁解も宣伝をも必要としないところの賢明且つ強力な、そして威力のある精神の人間の組織体、常に精神の自由を保持し、人民を意識的且つ組織的に、真のデモクラシーへと教育し、不断にこの教育の完成と政治的成熟の状態へつれて行こうとするところの「精神」の組織体、デモクラシーの制度を厳しく監視しながら、デモクラシーがそこなわれなり、あるいは全くなくなったり、デモクラシーの根本的事項

である平和が脅かされたりすることを厳として見張っている強力な公権的集団、つまり、真正の知識人の威力あるインレデントを、トーマス・マンは \vee Orbiter \wedge と言う言葉で表現しているのである。マンは、あの時点におけるヨーロッパのブルジョワ「デモクラシー」の墮落に直面して、そしてまた、支配的ブルジョワジーの文学的下僕 \vee ableと化した一部「文明文士」にあてつけて、こゝでさしあたりまたしても「ドイツ民族」を持ち出してはいるが、あらゆる「政治」において、かゝる道徳的な訂正者 *Korrektiv* の不可欠性は否定出来ぬ要請であるだろう。真正デモクラシーにあつては、政治的なものと精神的なものとの間の不協和 *Nichtbereinstimmung* はあくまでも認められねばならない。何故ならば、一般に「精神は政治ではない」からであり、人間の現象としての政治の現実そのものを批判するのが文学の、そして自由なる精神の宿命だからである。

最後に、マンの「省察」の胎中には、「生」が人間に取つての *Postulat* である、という深い思索がある。ポストゥラート——「最も深い懷疑も到達し得ない彼岸にある定言的命令 *Kategorischer Imperativ*」であり「公準」というふうにマンによって規定される「生」は、あらゆるものに優先しなければならぬのである。「正義」と「真理」とが、その政治的実現のためにあらゆる形での「ギロチン」を必要とするような場面に陥った時、マンは、「生」というイムペラティ

ーフを持ち出すのだ。そして「生」の基本的条件は「平和」である。「平和」もまた「生」と並んでカタゴリーシアー・イムペラティーフとならねばならないのである。そして一切の政治思想、一切の政治本能、政治的ラディカリズムはいまや再びこのイムペラティーフに帰らねばならないのである。あらゆる陣営が帝国主義化し、ラディカルに「政治」化し、モラルを喪い、アーナキーとカタストローフとに陥っていた時、マンはこの保守的な概念にあらためて帰っているのである。ゲーテのごとく「生」を自己完成の場として激しく生に執着し生の意義にめざめ、一切の生の現象をモラリッシュに追及解析することによって、生の内実を發展せしめる原因とすることを文学的使命とするマンにとっては、「平和」は絶対必須の要件だったのである。彼は「省察」のなかで、一九〇五年の作品「フィオレンツァ」のなかの精神の代表者である修道僧ジロラモの、ロレンツォに對することは、「力だよ、ロレンツォ・マグニフィーコよ、純粹と平和を欲する力だよ」(傍点筆者)という言葉を再びとりあげて次のように言っている。「『純粹と平和』、これは『文明』の平俗語 *platte Sprache* では『人間的自由と平和』 *human freedom and peace* といふものではないのか?」と。こゝでは、「純粹」とは、あらゆる党派の関心と利益、飽くことなき金銭的利益、そして権力への欲求などの人間的拘束を離脱し、「生」の「自然」に纏綿する一切の暗さ・蒙昧さを、自由にあらゆる手段をあげて淨化

し進歩せしめるという完全に一貫し、統一された精神の姿勢と行動——そういう「純粹」を意味するであろう。こゝでは *und* および *and* によって、二つの概念の内実是不可分に結合され一体となっているのである。「自由」と「純粹」が「生」の進展のために必要であるならば、「平和」もまた不可欠の必要であり、「生」が至上命令であるならば、「平和」もまたカタゴリーシジャー・イムペラティーフとして、自明且つ最高の人間的美德となるのである。かくて、「純粹と平和を欲する力」は、マンがヨーロッパの知性と良心とに向つて要請した至高の一項目であり、「省察」は、「生」のためにあるべき「政治」を、「戦争」という「死」の形にまで変貌せしめざるを得なかったところの国家主義の限界並に「万人に對する万人の戦」という意識を支えている現実主義的哲学が是認した政治のモラルの墮落と頹廢とに對して投げかけられた不退転の一モラリストの抗議だった。それは、デモクラシーそのものの「否定」の意識に立つものではなく、あの時点における「デモクラシー」が露呈した現実への「抵抗」だったのである。

Text——

T. Mann: *Betrachtungen eines Unpolitischen* S. Fischer Verlag
Berlin 1920

Literatur——

Flincker, Martin: *Thomas Manns politische Betrachtungen im Lichte der heutigen Zeit* Mouton & Co. 1959

Heller, Erich : Thomas Mann Der ironische Deutsche Suhrkamp

Verlag 1959

Kantrowicz, Alfred : Heinrich uad Thomas Mann Die persönlichen,
literarischen und weltanschaulichen Beziehungen der Brüder

Aufbau Verlag 1956

Mann, Victor : Wir waren fünf Bildnis der Familie Sudverlag

Konstanz 1949

Lukacs, Gerge : Thomas Mann Aufbau Verlag 1953

M. wolf, Hans : Thomas Mann Werke und Bekenntnis Franke

Verlag Bern 1957

Faesli, Robert : Thomas Mann Ein Meister der Erzählkunst Atlantis

Verlag 1955

Eichner, Hans : Thomas Mann Eine Einführung in sein Werk

Franke Verlag Bern 1953

Lion, Ferdinand : Thomas Mann Leben und Werke Verlag Oprecht

Zürich 1947

Bauer, Arnold : Thomas Mann Colloquium Verlag Berlin 1960

Nicholls, R. A. : Nietzsche in the early work of Thomas Mann

University of California Press 1955

ドイツ社会民主党の発展と本質・ヴァイル・クルム・マトウル中村・
田中龍雄共訳 (Matull, Wilhelm Werden und Wesen der

deutschen Sozialdemokratie 1957)

ドイツ史・ジャック・ドローズ 鎌川訳白水社刊